

乳原孝先生のご退職にあたって

鍛 治 宏 介

乳原先生，長きに渡るお勤め，本当に，お疲れさまでした。

乳原先生は，1954年に東大阪市でお生まれになり，関西学院大学文学部史学科，同大学院文学研究科博士課程で学ばれた後，1998年より京都学園大学経営学部の助教授として着任されました。2023年3月に先生と一緒に本学を卒業する4年生の学生が生まれる2，3年前から，25年間もの長きにわたり，本学で教鞭をとってこられたことになります。2015年4月の京都学園大学人文学部の設置にともなって，人文学部にお移りになられまして，人文学部では，西洋史概説や歴史学入門などの講義科目，スタートアップゼミや専門ゼミなどのゼミ科目，文章表現やキャリア関係の科目などをご担当いただきました。

先生の西洋史概説の講義は，それ以前の大学共通科目時代から一貫して，学生の間で評判の人気講義でした。お得意の拷問の話になると，いつも微笑んでおられる乳原先生の優しい目が，キラリと輝いてくるという学生たちの話もよく聞いておりました。

30代半ばに，当時の仕事をなげうってでかけられたというイギリスでの2年半の留学時代に，図書館や史料館に籠もって収集されたというロンドンのブライドウェル矯正院の膨大な記録を分析された主著『エリザベス朝時代の犯罪者たち—ロンドン・ブライドウェル矯正院の記録から—』（嵯峨野書院，1998年），『「怠惰」に対する闘い—イギリス近世の貧民・矯正院・雇用—』（嵯峨野書院，2002年），またその後に進めてこられたロンドンのワークハウスの研究においても，一貫して，当時の民衆たちの生活に寄り添った，先生の温かくも客観的な眼差しがみられます。その眼差しは，ご趣味の俳句にもいかされているのだと思います。



2022年12月4日、堺での研究室旅行にて

人文学部時代には、大学全体の入学センター長、歴史文化学科の学科長などの要職も勤めてこられました。特に、大学の大きな変革期に、入学センター長を勤められたことは、本当に大変だったと思いますが、その間も、いつもと変わらない柔和な笑顔で、授業や学生対応を続けておられました。

この文章を執筆している鍛冶が教務主事を長くしていたこともあり、何事も優しい笑顔で受けいれてくださる先生に甘えて、あれやこれやと、先生にはお頼みをしてしまいましたが、全て快くお引き受けいただきまして、本当にありがとうございました。歴史文化学科では、今年度、卒業する学年の専門ゼミをもっていただいたのですが、学生たちは先生のゼミにはいることを本当に喜んでいました。

共著の『流行と社会—過去から未来へ—』（白桃書房、2004年）でも、流行

の携帯電話の話をしておられましたが、最近は、さらに携帯電話からスマートフォンに変更されたとのことで、操作を覚えておられようと頑張っている姿にほっこりした、とこの文章を書くにあたって聞き取り調査を行った先生のゼミの学生からうかがいました。またキャンパス内でも外でも、学生をみかけたら、いつも気さくに声をかけてくださるのが嬉しかった、という声も聞きました。そのような優しい心配りをかかさずに、何事にも真摯な姿勢で取り組まれる先生の姿をみながら、学んでいた学生たちは、卒業後もまっすぐ進んでいってくれると思います。

これからもイギリスから取り寄せておられるという紅茶をお飲みになりながら、⁽¹⁾のんびりと霧の街亀岡で俳句を楽しまれることかと思いますが、ついつい怠惰になってしまうわれわれを鞭打ちに、太秦にも足をお運びいただけましたら幸いです。本当にありがとうございました。

注

- (1) 船団の会編『朝ごはんと俳句365日』人文書院、2018年 71・177頁